

杜甫はどのように陶淵明を契機としたか

大上 正美

はじめに

詩の語りの背後には〈表現主体〉(歴史上の作者らしき存在)がいる。同じように、読みの背後には主体としての〈われ〉(現在を生きる読み手)がいる。そして今ここにテキストがある。どのように読めば、作者は蘇るのか。読みの一つの視点として、その作品をどのように読んできたかを検証することから見えてくるもの(蘇るものや蘇らないもの)を探ること。たとえ蘇らなくても、なぜに蘇らないのかに考えを及ぼすこと。蘇れば、そこに〈詩〉が確認できる。はじめから〈詩〉の時空と〈表現主体〉が〈われ〉のまえに前提されているわけでは必ずしもない。しかし読まれてきたそのたびごとの確かな時間があるから、今〈われ〉の前にテキストがある。したがって受容をめぐる研究は、表層の受容史にとどまることはできず、作品を読んできた

〈他者〉の生と文学の様相をも浮かび上がらせるものでなければならぬだろう。

今回問題にする第一点は、陶淵明(三六五〜四二七)の受容をめぐる〈愛好から受容〉の様相、その限界及び特化と深化を、南朝の文学者と王績・孟浩然で確認することである。第二点は、受容をめぐる一様相として、否定的な言表を契機に表現主体の生の覚悟が対自化される、そのような杜甫の「遣興五首」における詩作の磁場をめぐって考えてみることである。

一 南朝の愛好者たち

南朝宋・顔延之(三八四〜四五六)は十九歳年長の陶淵明と同時代を生き、生涯に二度の交流をもった。東晋の義熙十年(四一四)、二十九歳の彼は江州刺史劉柳の部下として尋陽に行き、きつぱりと仕官を辞して十年になる淵明の所

に出入りした。その後都で文才をもって政治の中樞に認められていった彼は、宋王朝成立後永初三年（四二二）、権力争いに巻き込まれ、始安太守左遷の憂き目に遭う。赴任への途次、尋陽に暫く滞在し、日々淵明との酣飲にその憤懣を紛らした。去るに臨んで、貧窮生活の援助にと淵明に二万錢を留めたが、淵明は悉く酒屋に預け、その都度の飲み代にしたと伝えられる。顔延之の淵明への畏敬の行為は、淵明的な生への無上の共感ゆえであつたであろうが、当の淵明から見れば同時に若き日の出世前の顔延之とは違った、庇護者まがいの上から目線の心配りではあつた。淵明は権力者王弘や檀道濟の計らいを断固として拒絶したが、顔延之の好意は一応は受けとる、そのやりとりを隠者の風貌として恰好のものだとして伝記記述者は書き留めているのである。その五年後淵明が亡くなると、家族からの懇請で顔延之は「陶徵士誄」を書く。陶淵明に関する同時代の貴重な資料であり、また「南岳の幽居者」を社会的に高く極めた作品となつた。

その中で顔延之はある交流の場での淵明とのやりとりを描写する。官界から遠ざかる淵明に対して、「独正者危、至方則礙。哲人卷舒、布在前載。取鑿不遠、吾規子佩」と言いかけたのを色を成して途中で遮つた淵明は「違衆速尤、

迂風先覺。身才非矣、榮声有歇」と言い切る。その場面を思い起こし「叡音永矣、誰箴余闕。嗚呼哀哉」と死を哀しむ。顔延之の淵明評価や悼む真情に一点の嘘はないだろう。ただ、厳しく自己を批判する淵明を書きとめ、人徳を称える誄本来の作品としての完成度を極点に押し出しているところは、自己の処世や文学の枠組の中で文才の限りなき發揮でもあつたのである。言い換えれば、淵明的な生き方とその内面と対峙して、自身の生と文学までぐらぐら揺さぶるものでは決してなかつたこともまた事実である。顔延之には顔延之の生と文学が貫かれてあり、淵明の生と触れあいそれを認めることによつて自己の風趣と文才を再確認するかのようにして官界で生きるのである。

陶淵明の詩の世界に共感する劉宋の鮑照（四一四？～四六六）と、宋齊梁を生きた江淹（四四四～五〇五）とはそれぞれ、「長憂非生意、短願不須多」で始まる十句からなる「学陶彭沢体」、「種苗在東臯、苗生滿阡陌」で始まる十四句からなる「陶徵君潜田居」がある。前者は「奉和王義興」の副題があるように、王弘の子王僧達のサロンで示した、淵明に学ねた詩で、人生的発言や、酒と琴が、淵明の風流への理解を明示している。ただ、冒頭の危仄を避けない句作りや、後半の秋風を快く受ける一夜の、「清露潤綺羅」

や「歎息望天河」の歎息の時空を現出させているところが、鮑照自身の詩才の誇示でもあった。後者は「雜体詩三十首」の一で、淵明独自の詩空間としての田園生活の再現を旨とした、江淹自慢の擬詩である。その成功は、後に陶淵明詩集の中に「帰園田居六首」の第六首とまで誤って挿入されていて、六朝詩では淵明だけしか評価しない北宋・蘇東坡が淵明詩と思ひこみ、「和陶帰園田居六首」を書いてその詩に和した程なのである。この事実は、似せて作る端的な対象としての江淹の読み込みと詩作りの力量を物語っている。

六朝後期には批評や選集といった文学行為が際立っているが、そこでの陶淵明理解は見逃すことができない。高度な原理論を展開する『文心雕龍』には陶淵明への言及はないが、それと双璧の個別詩人論、梁・鍾嶸（四六八？～五一八？）『詩品』では中品に挙げられ、淵明の「文体省静、殆無長語。篤意真古、辞興婉惬。每覩其文、想其人德、世數其質直」とあり、修辭がより重視されるなかでの異端の人生派としての評価がなされ、「古今隱逸詩人之宗也」と位置づけられた。後代には「中品」評価をめぐってその不当な低さを議論されたりもするが、鍾嶸による精一杯の高い評価であった。「至如「權言酌春酒」「日暮天無雲」、風華

清靡、豈直為田家語邪」の但し書きもあるように、当時田舎詩人でしかないとの世評にもかかわらず、都の文壇にも引けを取らない、淵明としては例外的な「風華清靡」な一面も指摘しているところに、鍾嶸の苦心の読みと批評眼が示される。

陶淵明の愛好者として際立つのは言うまでもなく、梁・昭明太子（蕭統）（五〇一～五三二）である。『文選』収録詩文は八首という文壇の限界があったが、彼は『陶淵明集』を編み、「序」と「陶淵明伝」を書き、詩文からにじみ出るその人徳を深く愛好すると言い切っている。兄昭明太子の文学の好みとは対照的な艶詩の担い手蕭綱もまた、いつも手より離さなかつたほどであったとの証言もあり（顔之推『顔氏家訓』文章篇）、時代の詩潮にかなり淵明愛好が浸透していたことを想起させるのである。

その他詩句の上での陶淵明を意識したものは次第に増えて行くが、以上の南朝文人たちの淵明愛好は並のものではなかつたと言えよう。ただ、受容ということに関しては、愛好という次元を出ることなく、それは彼ら自身の生と文学に誠実な姿なのでもあった。

二 愛好から受容へ —— 王績と孟浩然

時代は唐になるとなかでも王績と孟浩然には、淵明の生と詩を、自己の脱俗の生の固有の他者として重ねて受けとめ、それに加えて独自の生の姿を自己実現していった、愛好から受容への様相が見てとれる。淵明受容によって自己は（個として成る）、と言える点が単なる愛好とは違うところである。

王績（五八五？～六四四）は隋唐交替期の棄官の人。混沌とした生々しい情況にあつて、確固とした自己を貫く上で、陶淵明の生の姿（郷里での隱逸空間）と詩文に自己を重ね、特に酒に特化して自己主張した。また、盛唐・孟浩然（六八九～七四〇）は郷里で在野の風流人としての、淵明にならった生涯を送り、自在な日常、自在な非日常を詠じる詩を残したところに、淵明受容からの深化の様相が見てとれるのである。

王績は王朝交替の難しい時代に仕と帰郷を繰り返し、時代に右往左往する陶淵明から学んで範とする生涯を送り、「五斗先生伝」「自作墓誌文」をはじめ、詩文も直接意識する所が多かった。ただ、貧窮生活や農耕の喜怒哀楽を表現していないとか、「仲長先生伝」等の作品のように実際の

隠者との交友から受ける刺激があるなど、淵明との微妙な隔たりも無視できないが、基本となる処世と精神は淵明への傾倒抜きには考えられない。彼も淵明にならつて酒を読み、「桃花源記」にならつて「醉郷記」という理想郷も書いてはいるが、ここでは陶淵明の酒と言うよりは劉伶などの飲んべえを直接意識したものである。酒に存在を特化した王績の個性であつたが、そこにこそ淵明を固有の他者として受容することによって、亜流者の域を大きく超え、王績の個性が示されたと言つてよい。多くの酒をうたう詩の一つ、「戯題卜舖壁」では「且逐劉伶去、宵隨畢卓眠、不応長売卜、須得杖頭錢」とあり、面目躍如たるものがある。孟浩然是安祿山の乱に遭遇する直前の玄宗泰平の世を、郷里襄陽で在野の風流人として、陶淵明にならつた生涯を送り、田園生活や旅を詠じる詩を残した。田園での楽しみの一つとして、郊外の農家の主の招きに応ずる「過故人莊」詩などは、淵明の田園生活と近隣の農民との交流を思わせる。「故人具雞黍、邀我至田家」で始まる五言律詩であるが、ここでは淵明の詩句と詩材をそのまま織り込み、それを起承転結の巧みな構成に仕上げている。招待を受けて楽しみに出かけ、村が見えてくる光景、酒を前にして出来具合を語る百姓同士の団欒、そして今日一日の感謝の気

持ちを「待到重陽日、還來就菊花」と言いおく結びは、淵明の古詩から律詩への完熟度を示している。孟浩然の時代は淵明のそれとは違い、時代への暗い関わり方は薄く、また、貧苦のなかの節操を述べる切実さや、死する存在の恐怖などは表現されないが、それでも淵明の生と詩からの影響は深い。そのことはたとえば、「北澗泛舟」の「北澗流恒滿、浮舟舳舳通、沿洄自有趣、何必五湖中」のように、澗南園の北にある谷川で、水の流れのままに舟遊びする、在野の人としての自在な日々は、淵明の川辺の有り難い時間を歌う「遊斜川」を想わせる。ただ、そこでの手放しの自在な日常のよろこびは、すこし淵明とは違った孟浩然の豊かさを示している。淵明詩にあつては、「歲開倏五日、我生行帰休。念之動中懷、及辰為茲遊」で始まるように、有限存在であることへの突き上げる痛みにせき立てられる故の行動なのであつた。また、孟浩然是当時にしては珍しい觀光旅行をした詩人であるが、たとえば「楊子津望京口」で「江風白浪起、愁殺渡頭人」とうたっているなど、純粹に感傷旅行を楽しんでおり、陶淵明の役目からの旅を詠じた詩群のように、目的地向かいはじめずぐに、こんな所にいる自分ではない、と帰隱の意思の固さを詠じる類とは対照的である。それが孟浩然詩にとって特化された

非日常の自在さであつたと言えよう。

以上のように、二人は肯定的に全身で陶淵明をなぞるのだが、南朝の愛好者と違うその受容から、自分ならではの個性的な生と文学の様相を実現させていくのである。

三 否定を契機とした杜甫の陶淵明受容

——「遣興五首」の磁場をめぐる

盛唐・杜甫（七一二～七七〇）の「陶潛避俗翁、未必能達道」で始まる八句の古詩「遣興五首」其三では陶淵明が直接対象とされる。淵明の「一生亦枯槁」（「飲酒二十首」其一）の趣意や子どもたちへの愚痴をつづつた「賁子」を意識した発言で構成されていて、厳しい淵明批判か、それとも杜甫の自嘲か、等々の議論が従来からある。ただわたしは、作品の読みかたの問題として話者（speaker）と作者（author）とを分離し、前者は批判をぶつけ、後者は表現主体の内面を抱えこんでいると読む。そして作者の内面は五首の連作の中にこの詩を位置づけることによって接近できるのではないかと考えるのである。（仇兆鰲「杜詩詳註」卷七に「遣興五首」とするものであるが、引かれる黄鶴注では、乾元二年（七九七年、四十八歳）秦州での作とされている。もともと何首も同題の詩や連作詩があるので、テキストによってはどの連作

に属するか異説もあるが、今は『杜詩評註』でいう五首を前提に考えてみる。

天宝十三載（七五四年四十三歳、在長安）の時に「醉時歌」（原注「贈広文館博士鄭虔」）のなかで、杜甫は「先生早賦扁去来、石田茅屋荒蒼苔」と、陶淵明の帰田に重ねて鄭虔に向かつて呼びかけ、難しい時代への急速な傾斜の危機を表明する。淵明理解を今に友人と共有せんとする生の指針となっているのである。その杜甫が、翌年はじめて小役人として任官したとたん、すぐに安祿山の乱、長安幽閉、長安脱出、左拾遺に任官、房琯弁護、華州の司功參軍に左遷、乾元二年（七五九）四十八歳のとき、近畿の大飢饉で棄官（または免官）、七月秦州へ、十月秦州を去つて同谷へ、十二月に成都にといった、目まぐるしく苛酷な時代に翻弄され、後半の放浪の人生に入っていく、その乾元二年の秦州での作なのである。

其一；蟄龍三冬臥、老鶴万里心。昔時賢俊人、未遇猶視今。嵇康不得死、孔明有知音。又如壠坻松、用舍在所尋。大哉霜雪幹、歲久為枯林。

其二；昔者龐德公、未曾入州府。襄陽耆旧間、処士節独苦。豈無濟時策、終竟畏羅罟。林茂鳥有帰、水深魚知聚。挙家隱鹿門、劉表焉得取。

其三；陶潛避俗翁、未必能達道。觀其著詩集、頗亦恨枯槁。達人豈是足、默識蓋不早。有子賢与愚、何其掛懷抱。

其四；賀公雅異語、在位常清狂。上疏乞骸骨、黃冠帰故郷。爽氣不可致、斯人今則亡。山陰一茅宇、江海日清涼。

其五；吾憐孟浩然、短褐即長夜。賦詩何必多、往往凌鮑謝。清江空旧魚、春雨餘甘蔗。每望東南雲、令人幾悲吒。

以上の五首の「詠史詩」を、i 対象となる人物、時代、ii そこであたわられる生の姿、その要約、そしてiii 語り手の確認、として整理すると、以下になるだろうか。

其一では、i 三国の嵇康と諸葛亮、ii 知己がいるか否か、士不遇、iii 時運に出会えない語り手である自分。

其二では、i 後漢末の龐徳公、ii 隠者・処士の節、隱遁、iii 隱遁の姿勢の強さへの、語り手の共感。

其三では、i 東晋の陶潜、ii 避俗者の内面の悩み、その日常の揺れ、iii 隠者も「不達道」「恨枯槁」を免れない、とする語り手の認識。

其四では、i 同時代の賀知章、ii 致仕の帰郷、その清狂の生涯、iii 達人の人に対する語り手の敬意。

其五では、i 同時代の孟浩然、ii 在野の詩人、その貧窮と詩作、iii 表現者としての生という、語り手による高い評価。

この連作の言志性は、起（其一）・承（其二）・転（其三）・

結（其四・其五）の構成に明らかである。官職を棄て（または免職され）秦州にたどり着いたときの、強い気持ちと揺れる思いと、そしてこれからの自身の生のイメージに向かいあい、静かな決意・覚悟に導く内面を追うように表現されている。そこで唯一対象に対して疑問を提出するのが第三首である。

したがってこの連作では、陶淵明を否定的媒介にして自身の生を対自化する。つまり、陶淵明を詩作の磁場に招かせることによって、避官後まもない、具体的生の一時期（「遣興」という詩題から見ると、一時の感慨に終わるかも知れない）に選択・決断する、その先へと踏み出して行く自身の覚悟を、作者は確かに見ているのである。そのようにして自己のなかに陶淵明を喚起するのは、たとい杜甫と淵明とが現実にはその生涯の軌跡や対社会的姿勢を異にしていようとも、このとき以前からもその後にあっても、つねに基底には陶淵明の真情への共感があればこそであるの言うまでもない。

事実その後、成都に滞在した上元二年（七六一年、五十歳）には、「可惜」で「花飛有底急、老去願春遲。可惜歡娛地、都非少壯時。寬心忘是酒、遣興莫過詩。此意陶潛解、吾生後汝期」とまで陶淵明の酒と詩に肩入れしてうたう。

そして「江上值水如海勢聊短述」では、「為人性僻耽佳句、語不驚人死不休。老去詩篇渾漫興、春來花鳥莫深愁。新添水檻供垂釣、故著浮槎替入舟。焉得思如陶謝手、令渠述作与同遊」と詠じ、詩表現への妄執を冒頭で語りつつ、同時に老いと春の訪れ、大江の川縁での垂釣、というささやかな安穩を得た日常での詩作の意味を問い直し、その変容をも語り出したのである。かくてある生活空間での詩作で、表現することの内実として、陶・謝の田園・山水の文学が一つの契機となっている。それは「遣興五首」の結論としてうたわれた表現者たる自覚からつながって行ったものであるに違いない。このように、淵明を詩作の磁場として招き寄せたことからくる、ダイナミックな内的体験、つまりは否定を契機とした受容の姿を、わたしは見るのである。王績や孟浩然の肯定的受容からの自己特化とは対照的な陶淵明受容であるが、それもまた表現ということに関しては、真の受容の価値ある一様相であったと評価するのである。

おわりに

以上陶淵明詩受容のありようを駆け足でたどって見てきたが、おわりに、とくに次の三点についてわたし自身の文学研究の視角を確認しておこう。

(1) 人が人を理解すること、人が人に影響を受けるとい
うことは、どういうことなのだろうか。そこから読み手は
自身の生の姿が見えてくる、どのような自己であり、どの
ような自己で在らんとするのか、と。(2) 一見違ったよ
うな生の姿、ものの考え方をする者であっても、深く影響
を受けるといふことがあるが、それはどのような様相を呈
するのだろうか。そこからどのようにして自己は〈成る〉
のか、と。(3) そのとき、多様な生の姿の一つの価値(あ
くまでも存在の一つの姿)として、〈表現者〉が存在するだろ
う、と。

(青山学院大学名誉教授)

